

## 講演 情報って何？本って何？

### 2. 絵本が与えてくれる情報の特質

—幼児にとっての情報—

小池 茂子

私は児童学科の小池と申します。私は児童学科の教員でありますので、今回の講演の共通テーマであります「情報って何？本って何？」を人間の赤ちゃんの世界を一つの切り口に見てまいりたいと思います。

先ほど、若松先生のご講義の中で「情報の定義」が紹介されました。そこでは「情報とは、事実、思想、感情などが他者に伝達可能な形で表現されたもの」との定義がありました。そして、その情報を伝達するための媒体、情報を伝える役目を果たす仲介物をするものをメディアといい、その代表的なものとして、言葉、文字、文章、物語、あるいは伝達を意図した声などがあることを教えていただきました。

このような情報メディアを通じて、情報が伝えられていくわけですが、私たち人間はこのような「情報」というものをいつの時点から受け取っているのでしょうか。まず、それを考えていただくために皆さんに、ビデオをご覧いただきたいと思います。

#### 【ビデオ視聴】



#### ビデオ

##### 『NHK特集 お父さんへ

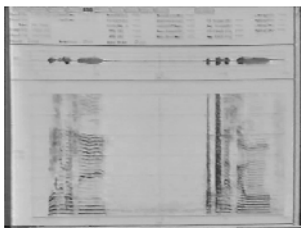
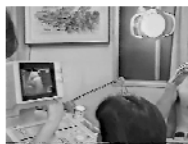
—赤ちゃんからのメッセージ—  
よりお父さんが、お腹の中のわが子に言葉を掛けている。

外界からの音は果たしてお腹の中の胎児に伝わるのだろうか。

また、比較的低い声のお父さんの声は胎児に明確に伝わっているのだろうか？

帝京大学医学部にて。

学生の胃の中に超小型マイクを飲み込んで、さらに痒水で満たされている子宮の環境に近づけるために胃の中は水で満たしてある。そして、お腹の近くからお父さんに「もしもし、パパですよー。」と言葉を掛けてもらう。さて、お腹の中にはお父さんの声は伝わったのだろうか。また細かな声の抑揚の判別は可能なのか？



(図2-1) マイクが拾ったお父さんの声



(図2-2) 声の抑揚も伝わっている

赤ちゃんの視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感で真っ先に発達するのは「聴覚」で、受精後の5～6週目で脳の形成と耳の穴ができ、24週ごろ聴覚器官が完成します。その頃から母親の腹壁を通し、いろいろな音が胎児の耳に入ってくるそうです。また、外界からの音声情報も8ヶ月くらいになると胎児は聞き分けることができるとされています。

ビデオを見てお分かりいただけたように、私たちは胎児として母親のお腹にいるときから、さまざまな情報にさらされているといえるのです。そして、その中でもお母さんやお父さんからお腹の赤ちゃんに、意図を持って語りかける言葉、すなわち「伝達を意図して発せられている声」は親の思いをつたえる感性情報として、まだお腹の中にいる赤ちゃんに確実に伝わっていると考えられ

ています。(図2-1)(図2-2)のようにお腹の中では、外界からの音はどちらかという和高音部は消えて低音部がよく伝わるようですが、低音部というのは音声情報の中でも声の抑揚・感情をつかさどる部分の音であることが判っています。胎教という言葉 皆さんもご存知かと思いますが、クラシック音楽等に代表されるだけでなく、親が語る言葉の機微(怒り、よこび、悲しみ)などの感性情報は胎児の健やかな育ちに大きく影響を及ぼすものなのだということを覚えておいていただきたいと思います。

さて、小さな子どももさまざまな情報を感覚器を通じて受け取りながら育っていくわけですが、絵本の読み聞かせというものは小さな子どもにさまざまな世界を思い描かせる、最も有力な情報伝達のありようといえましょう。

赤ちゃん研究という学問の領域では、同じ絵本を読み聞かせたとき、お父さんが読んだときとお母さんが読んだときで子どもの反応に違いが生じるか否かという研究が行なわれています。



**ビデオ『NHK特集 お父さんへ —赤ちゃんからのメッセージ』より**

**東京大学人類学研究所 正高先生**

子育てにおけるお父さんとお母さんの役割の違いについて研究している。

明るくて楽しい内容の絵本と、お化けが出てくる怖い絵本のそれぞれを、お母さんとお父さんが交互に読み聞かせ、それを聞いている赤ちゃんの絵本への集中度を赤ちゃんの表情や発汗の量から明らかにしようとしている。



まずは、明るく楽しい絵本をお母さんが読み聞かせてみる。すると赤ちゃんの表情も和んで、絵本によく集中していることが解る。

同じ内容の絵本を、今度はお父さんが読んでみせた。すると、間もなく赤ちゃんは飽きてしまい、よそ見を始め全く絵本の内容に注意を向けようとしな



しまいには、飽きてしまい身体を絵本から反らしてしまった。



【明るくて楽しい絵本】



【怖い絵本】

続いて、今度はお化けが出てくる怖いお話を、お母さん、お父さんの順番で読んでいった。



お母さんが読み始めて、程なくして赤ちゃんの視線は本とは別のところに…。

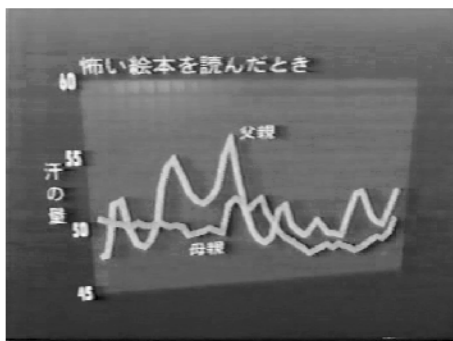
今度は、同じ怖い話をお父さんが読み始めた。すると、赤ちゃんはじっと絵本に集中し、お話しに引き込まれ歓声を上げたりした。



【怖い絵本】

(図2-3)

怖い絵本をお母さんとお父さんが読んだとき、それぞれのケースの赤ちゃんの手の汗の量。お母さんが読んだときよりも、お父さんが読んだ時のほうが明らかに発汗が多く、集中していることが見てとれる。



ビデオにあったように、同じ絵本の絵、絵本の文章という情報を子どもに伝えようとしているのに、子どもの反応に差が生じるとはどのようなことなのでしょう。また、楽しい話やコミュニケーションを肯定的に促進するような内容のお話の場合は、お母さんの声で読んでもらったほうが子どもは集中します。他方で、怖い話や、「〇〇しないとこんなふうになっちゃうぞ～」と子どもの予想を裏切るような驚きや、子どもの自分中心の行動を戒める内容の時には上の(図2-3)にあるようにお父さんの声で読んでもらったほうが手に汗握って集中しているのです。

この研究はお父さんの声とお母さんの声の与える感性情報には違いがあると

いう一つの仮説を証明しようとしているのです。

また、このような研究は子どもを無条件に受容し、「よしよし」といってやさしく包みこむ即ち自分の赤ちゃんを受容する行為はお母さんの役割であり、子どもに想像もつかない驚きの世界や社会のルールや厳しさを教える役割はお父さんの役割というように、子育てに関する区別があると考える精神分析を背景とする心理学者たちの学説に近いといえるかもしれません。しかし、これも一つの仮説なのです。

絵本の読み聞かせという一つの事例をとってみても、そこに描かれている文字や絵は同じでも、伝えての声(や表情)といったものの違いによってそこに新たな情報が加わって相手には理解されていくのです。子どもはそれに敏感に反応していました。

福音館書店の相談役で『グリとグラ』を世に送り出した編集者として有名な「松井直(まつい ただし)」さんは、『絵本が育てる子どもの心』の中でつぎのように述べておられます。「絵本の中の言葉は、全部読み手のものなのです。作者のものではないのです。読み手の声で、読み手の言葉として子どもに伝えられていくのです。子どもは読んでくれた人の声で覚えていきます。」<sup>1)</sup>「絵本は子どもに読ませる本ではないのです。大人が子どもに読んでやる本なのです。そうしないと、絵本の本当の面白さは分かりません。耳で聞いて、目で全く同時に物語を読み取ったときに、子どもの中に本当の絵本の世界が見えてくるのです」<sup>2)</sup>と。

私どもの大学には、児童学科があつて将来、幼稚園や保育園で働くことを希望する学生が学びを続けています。その学生たちが幼稚園や保育園に実習に行つて絵本の読み聞かせをするのですが、ある学生は一瞬にして子どもたちの心をつかんで集中させることができます。でも、ある学生は全く子どもが絵本に集中せず、隣の子にちょっかいを出したり、席を立ってしまうこともあるのです。

その違いはなぜ起こるのでしょうか？ ストーリーにあつた声のトーン、読み手

の表情、これらが絵本の絵や文章とともに相手を物語の世界に引き込む情報媒体としてとても重要なのです。生まれて間もない子どもたち、字もまだ理解できていない子どもであっても、絵や音に或いは読み手の表情によっていろんなことを「情報として受け止めて」いることを判っていただけましたか。

また同じ物語の内容が語り手によって受けての違った反応を呼び起こします。同じ文章なのに、子どもたちはそこに何を感じ取っているのでしょうか？そのような視点からも「情報って何？」と、皆さんに考えていただければ幸いです。

1) 『絵本が育てる子どもの心』（日本キリスト教団出版局 2004年）p. 37-38

2) 前掲書 p. 51